



洞爺湖の湖面がキラキラと光り輝いている。中島がほんわかと浮かんでいる。この中島は約5万年前にカルデラの中央部に形成された溶岩ドームであり、巨大な噴火でできたカルデラの中に生まれた火山でもある。

昆布岳を目指して、230号線を走行中に中山峠を越えた所で突然姿を現した羊蹄山が赤味を帯びた光を放っていた。真狩コースや京極コースの時はまったく山並の風景が異なり、待ち合わせた道の駅で瞬く間に昆布岳登山が

## 再生なき破壊

— 洞爺湖サミットが残した課題 —

情報広報部

橋 本 洋 一

羊蹄山登山に変更となった。小屋閉めが間近に迫った9月末であったが、登山するわれわれに躊躇する気持ちはまったくなかった。登山は今までにないほど順調で、予定通りの時間で頂上に辿り着いた。雲ひとつない快晴の空が眩しく、洞爺湖周辺も箱庭のように見えた。黒煙が有珠山西側から噴出した2000年3月31日の噴火は記憶に新しいが、1977年8月8日の噴火による降灰を学生時代に札幌で経験した私は脈打つ地球の大きなうねり

を目の当たりにして、学童時代に見た桜島の噴火を思い出した。約11万年前からの破壊と再生を短い周期で繰り返してきたこの火の大地で造られた洞爺湖は周囲46km、面積68.4km<sup>2</sup>、最大深度約180mの最北の不凍湖である。

この洞爺湖で地球環境を守るための《環境サミット》が7月7日から9日までの3日間開かれた。8日に地球温暖化の原因とされる二酸化炭素などの温室効果ガスを減らすための議論がなされ、G8の会合で「2050年

までに世界で出される温室効果ガスを半減させることを世界の共通目標にする」との合意がなされた。翌9日にG8に中国、インドを

はじめとした8新興国を加えた16カ国（この16カ国で世界の温室効果ガスの8割を出している）で主要排出国会議が開催され、「まず、G8が2050年までに80〜95%減らすべき」との厳しい意見が新興国側からでたものの、温室効果ガスを減らす具体的目標が未決定のまま、国連に議論の場が移された。もはやG8だけで地球の運命を決定できないことは明白だが、地球規模に立つて議論することが必要不可欠な時代であることを改めて再認

識させられた3日間でもあった。

地球環境に最も責任のある人類。そして人類の生命維持に直結する医療問題も地球規模で議論される時代になった。医療も聖域なしの号令で2,200億円の社会保障費を削減する骨太案を堅持することを政府は決定したが、医療の崩壊が温室効果ガスによる地球温暖化同様に人災であるという事実に向背を向けている。

本年6月、OECD（経済協力開発機構）は医療に関する統計「ヘルスデータ2008年版」を発表したが、その内容は日本国民1人当たり医療費がOECD平均を下回り、加盟30カ国中20位で、2000〜05年の伸び率は年換算で2.5%とOECD平均の5%を大きく下回り、総医療費のGDPに占める割合は8.2%と21位であった。日本のGDPはかつての2位から転落し、今や17位になっているが、政府の誤った医療政策によって起きた医療崩壊はとどまることなく、再生なき破壊という結果に終わる危険性ははらんでいる。

再生と破壊を繰り返している火の大地に立つて思った。グローバルな視点に立った、小手先でない医療政策の遂行が必要とされているということ。地球が、そして地球に住まう人類が燃え尽きないようにするために。